

金正日

外交エピソード

朝鮮民主主義人民共和国

外国文出版社

チュチェ112(2023)

金正日

外交エピソード

朝鮮民主主義人民共和国

外国文出版社

チュチェ112(2023)

まえがき

偉大な指導者^{キムジョンイル}金正日国防委員長は、朝鮮革命を指導する全期間にわたって対外活動を精力的に行った。

金正日国防委員長は特に、長い歴史的根源を持つ朝中関係の発展に大きな力を入れ、朝中友好関係の新たなページを開くとともに、伝統的な朝ロ関係の新たな発展を重視し、朝ロ親善関係を拡大・発展させうる礎石を築いた。

この対外活動の日々、金正日国防委員長の偉大な思想と品性、崇高な徳義心がはっきりと示された。

金正日国防委員長がそれらの日々に見せた親和力と人間愛は、今日も朝鮮人民はもちろん、世界各国の人民を大きく感動させている。

編集部は、朝中、朝ロ友好関係を強化・発展させるための金正日国防委員長の対外活動におけるエピソードのうち、その一部をまとめて編集・発行する。

目 次

朝中友好の日々に	5
1. 朝中友好の強化のために	6
割れんばかりの拍手喝采	6
「中国共産党に栄光と勝利あれ！」	8
2台の「紅旗」乗用車	10
「金色大庁」に響いた『祖国を謳う』	12
2. 該博な知識	15
機雷でなく爆雷	15
燕窩「論争」	16
通訳と支配人のミス	18
午餐会が終わる時に	19
3. 気高い信義	21
延ばした故宮の参観	21
勧誘と拒絶	22
鄧穎超の感激	23
10分と2時間	25
4. 人民に思いを馳せる	27
農場でも宴会場でも	27
絶勝は待っているけど	30

5. 不思議な自然現象	33
天の配剤 (1)	33
大日照りの末に降った雨	34
天の配剤 (2)	35
 朝口親善の日々に	37
1. 厚い人情味と信義	38
ウマラトワの激賛	38
ひんぱんに来たら友情も厚くなる	39
昔の偵察兵の決断	42
レーニン廟を訪ねて	45
天も感心して涙を流す	48
「乙女の春」を取り戻したコルツォーバ	50
2. 魅惑と欽慕	52
ヤゾフの感嘆	52
人民のために	53
ロシア正教寺院の鐘の音	55
ウオロチャエフカ師団で	57
ロシアの極東で	59
総支配人の感激	64
贈り物—オルロフ種の馬	65

ブレヤ川のしぶき	67
バイカル湖の新しい伝説	71
祖国の人民を思って	77
ロシア指導部の誠意	78

朝中友好の 日々に



1. 朝中友好の強化のために

割れんばかりの拍手喝采

1983年6月、金正日国防委員長は中華人民共和国を非公式訪問した。

国防委員長が北京に到着したその日の夕方、中国共産党中央委員会総書記は、金正日国防委員長を歓迎して人民大会堂で宴会を催した。

総書記は予め準備しておいた演説文は横に押しやり、今夜は自分が心の中で考えていたことを話したいとし、われわれは尊敬する金正日同志を格別に喜ばしい気持ちで迎えた、金正日同志の中国訪問を通じて両党、両国の友好・団結はいつそう強化・発展するだろう、金正日同志が中国を訪問する期間、わが家に来たつもりで楽しく愉快的日々を送るよう願っている、と語った。

ついで、金正日国防委員長が宴会の参加者の熱狂的な拍手を浴びながらマイクの前に立った。

国防委員長は、まず、前年の4月に平壤で会ってから1年が過ぎた今日、こうして北京で再び中国の同志たちと対面するようになったことをうれしく思うとし、両国の指導者と人民が外交的慣例や格式を超越して実の兄弟のようにしきりに往来しながら友愛の情を分かち合い、厚くしているのは、決して両国の領土が隣接しているためだけではなく、われわれの心が親しい友情で結ばれ、相互の信頼の

感情が真実なものであるからだ、と語った。

続けて、中国共産党と中国人民が長きにわたる血みどろの闘いを通じて達成した成果を高く評価し、長い歴史の試練を乗り越えた朝中友好の不敗の強固さについて指摘し、次のように述べた。

「^{キムイルソン}金日成同志が早くから毛沢東同志、周恩来同志、劉少奇同志、鄧小平同志と結んだ格別に厚い親交は、両国の党と人民間の友好・団結の不敗さをしっかりと保障してきました。

互いに血と生命を捧げて共同の偉業のために闘った血縁的友好は、いかなる試練の中でも永久不滅のものです。

50余年のあらゆる風雪に耐え、旺盛な生命力を持って揺るぎなく成長してきた偉大な朝中友好は、今日さらに生き生きとした気概を轟かせて発展しています」

国防委員長の演説は万雷のような拍手によって何度も中断された。

演説は続いた。

朝中友好は代を継いで継承されなければならない、それは両国の革命の根本的利益に基づく必須の要求である。帝国主義に反対し、社会主義を建設する共同の偉業の遂行において朝鮮人民は永遠に中国人民と同じ隊伍に立って進むであろうし、これは朝鮮労働党の確固たる意志であり、わが人民の揺るぎない信念である。……

国防委員長が拍手喝采を受けながら席に戻ると、中国共産党中央委員会総書記は国防委員長の手を取って立派な演説を行ったことに謝意を表した。

「中国共産党に栄光と勝利あれ！」

1983年6月、中国上海に滞留して複数の工場や企業、港湾を参観した金正日国防委員長は、中国共産党第1回大会会議場記念館も訪れた。

1921年7月、当時フランス租界地にあったその家屋で開かれた中国共産党創立大会の参加者は13人だったが、彼らは全国の党員を代表していた。

会議の途中、警察が監視していることを知った代表たちは、即刻その場を去って浙江省嘉興県に移り、船上で会議を続けた。大会では党規約を採択し、指導機関を選挙するとともに、中国共産党の創立を宣布した。

記念館について具体的な説明を聞いた金正日国防委員長は、中国共産党は栄えある伝統、豊かな闘争業績と経験を持っており、中国人民を勝利に導く革命的党である、中国共産党の指導の下に中国人民は長きにわたる苦難に満ちた闘争を繰り広げて人民革命の勝利を収め、強大な社会主義国家を打ち建てた、と語った。

中国の党と人民が収めた成果を心から高く評価する国防委員長の言葉に、中国の幹部たちは深い謝意を表した。

記念館を見て回り応接室に入った国防委員長に、記念館の職員が感想録を見せた。

感想録には、金日成主席が1958年12月5日にここを訪ねて残した親筆がそのまま保存されていた。

「金日成主席同志の親筆が色あせしてはと思って、これまで原本は別に保存し、一般の参観者にはコピーしたものを見せています。金正日同志がお見えになったので、原本を持ってきました」

感想録を受け取って金日成主席の親筆を見る国防委員長の感慨はひとしお大きかった。

記念館の職員は語を継いだ。

「25年前には金日成主席同志がこの記念館を訪れ、今回は金正日同志がここを訪れたことは、われわれにとって大きな光栄です。これを永遠に記念するために、金正日同志が一筆残してくれるようお願いします」

国防委員長は彼の願いを容れ、闊達な筆致で感想録に次のように記した。

「現代化された社会主義強国を建設し、
共産主義偉業の完成のために
力強く闘う中国共産党に
栄光と勝利あれ！

偉大な中国共産党に崇高な敬意を表しつつ

金正日

1983. 6. 8」

たとえ長くはないが、朝中友好を大事にし、共同の偉業のために共に闘う戦友に対する気高い信義が集約された親筆！

その場にいたみな感激して一挙に拍手を送った。

2台の「紅旗」乗用車

2011年5月、金正日国防委員長は中国吉林省の省都長春市を訪問し、中国最大の自動車生産拠点である中国第一汽車集団公司を訪れた。

金正日国防委員長はその前年の8月に吉林省を視察した際の約束通りに同公司を訪れたのであった。

2010年8月の国防委員長の吉林省視察日程にはこの会社の参観も入っていたが、その日は雨が止むことなく降り続いた。

金正日国防委員長は、中国側の公安員をはじめ多くの人が冷たい雨に濡れるのは済まないことだ、彼らが風邪を引かないように会社の参観を取り消すべきだ、と言った。

省と会社の幹部たちがたいそう残念がると、国防委員長は今度吉林省を訪ねると必ず公司に立ち寄る、と約束していた。

中国第一汽車集団公司の幹部と従業員が立ち並んで金正日国防委員長を熱烈に歓迎した。

国防委員長は彼らに答礼し、会社の乗用車沿革紹介室である「紅旗」文化展示館に足を運んだ。

長い歴史を誇る公司以生産された代表的な乗用車が展示されている展示館には、1975年4月、中国を訪問した金日成主席が天安門広場で中国人民の歓迎を受ける時、鄧小平同志と共に利用した「紅旗」乗用車もあった。

その乗用車を見ていた国防委員長は、数十年が過ぎた今日まで車

を原状のまま丁寧に保管している会社の従業員たちの真心に深い謝意を表した。

「金正日同志、これはその時に撮った写真です。金正日同志に記念として贈りたいと思います」

写真には「『紅旗』をもって朝鮮の賓客を迎える」という文字が書かれてあった。

国防委員長は写真を受け取り、「ありがとうございます」と礼を述べた。

国防委員長は、乗用車生産工場と「解放」号トラック生産工場を参観しながら、現代化の推進状況と生産実態を具体的に把握した。

参観が終わると、吉林省党書記は金正日国防委員長を最高級乗用車「紅旗」がある所へ案内した。

「尊敬する金正日同志の訪問は会社のすべての従業員にとって大きな励ましとなります。公司では、絶え間ない現地指導の道を歩み続ける金正日同志の健康を祈願する心と金正日同志の訪問を最も熱烈に歓迎する心を込めて、先端技術を導入した新型の乗用車『紅旗』を贈りたいと思ってこの車を用意しました」

「それはどうもありがとうございます」

ついで会社の理事長が乗用車の性能と長所について説明した。

車内の騒音が極めて小さく、防音効果も「ベンツ」よりはるかによい、シートも後ろに座る客に便利のように設計されている、などなど。……

「よく分かりました。朝中友好の象徴としてありがたく受け取ります。ところで、今すぐ私が一人で車を運転して朝鮮に帰りたいんですが、そうしてもいいでしょうか」

金正日国防委員長が真顔で尋ねた。

一瞬、驚いていた理事長が、直ちに国防委員長は乗用車の性能についてユーモラスに言っていると気づき、自信ありげに答えた。

「はい、そうなさってもいいです。しかし、一つ条件があります。その前に乗用車を背景にして私たちと記念写真を撮ってください」

「そうしましょう。写真を撮ってから車を運転していきます」
金正日国防委員長は豪快に笑い、彼らと共に写真を撮った。

そして、省党書記と共にシートに座ってみて、立派な車だと褒めたたえた。

金正日国防委員長は公司を発つ前に次のように述べた。

「中国人民の真心がこもった『紅旗』乗用車を国際親善展覧館に展示し、われわれの次世代もみな見るようにします」

その言葉には、朝中友好をとわに引き継ごうとする崇高な志がこもっていた。

「金色大庁」に響いた『祖国を謳う』

金正日国防委員長の2011年5月の中国訪問は、北京でクライマックスをなした。

胡錦濤総書記は金正日国防委員長の中国訪問を歓迎して人民大会堂で盛大な宴会を催し、特別芸術公演も用意した。

歓迎宴は「金色大庁」と呼ばれる人民大会堂の最高級宴会場で行われた。

中国側は宴会を通常とは異なって革新的な方法で催すようにし

た。つまり、宴会が終わった後に芸術公演を行った以前の慣例を破り、宴会と公演を組み合わせたのである。

公演舞台には中国の歌謡と世界の名曲、朝鮮の歌謡をはじめ多彩な形式の演目が上がったが、その水準は高いものだった。

金正日国防委員長は非常に満足して述べた。

「芸術公演が優雅で高尚かつ、水準も高いです。特に、陶器形式の舞台の背景が特色あるものです」

胡錦濤総書記は喜色満面になって金正日国防委員長に言った。

「金正日同志は芸術に造詣が深いのですから、公演を用意しながらも気に入ってもらえるかどうか、内心心配していました。

それで、当該幹部に腕を振るってみるようにと強調しました。

金正日同志の高い評価を受けて、われわれはうれしい限りです」

「中国のテレビドラマ『毛岸英』も上出来です。私はそのドラマを観て涙を禁じ得ませんでした」

「私も家で息子や娘、孫たちと一緒にそのドラマを観ました。それを観ながら、次世代を中朝友好の歴史をもって教育する上で文学・芸術が極めて重要な役割を果たすということを今一度痛感させられました」

金正日国防委員長は公演を観ながら、党政治局常務委員をはじめとする中国の指導幹部たちとも話を交わした。

「朝鮮で金正日同志の指導の下に歌劇『梁山伯と祝英台』が『紅樓夢』に劣らぬ高いレベルで創作されて盛況裏に公演しているという話を聞きました。改めて正式に招きます。歌劇『梁山伯と祝英台』を一日も早く中国で公演できるようにしていただけないでしょうか」

「すぐ中国に送ることにします。ところが、『紅樓夢』公演の時のようにあまり長い間中国に滞留すると迷惑をかけることになるでしょう」

「でも、あんなに立派な公演はいくら長く公演しても嫌う人がないでしょう」

やがて、ほとんど2時間にわたる宴会と公演が終わった。

ところが、この時、意外の出来事が生じた。

金正日国防委員長が、自分が好きな中国の歌があるとし、歌謡『祖国を謳う』を要請したのである。

『祖国を謳う』は中華人民共和国創建1周年に際して創作されたもので、中国人民が好んで歌う歌謡であった。

宴会の参加者たちは、五星紅旗をはためかせて富強・繁栄の祖国を打ち建てようとする中国人民の思想・感情が脈打つ歌謡を、「金色大庁」が割れんばかりに俳優たちと合唱し、拍手をした。

一曲の歌謡が宴会の雰囲気を瞬時にクライマックスへ高調させた。

2. 該博な知識

機雷でなく爆雷

1983年6月、青島の中国人民解放軍北海艦隊を訪れた金正日国防委員長は、停泊中の駆逐艦に上がり、艦の技術装備について艦長の詳しい説明を聞いた。

ところが、朝鮮語に堪能なはずの中国人通訳がひとかたならず難儀することになった。

艦長が電子技術装備の機器・設備や計器、それに武器を指しながら行う説明を、彼はしどろもどろになって通訳した。軍事分野の技術用語に暗くて、しきりに首をかしげては、救いを求めるようにかたわらの朝鮮人通訳の顔をうかがった。

ところが朝鮮人通訳も複雑な軍事技術用語に辟易し、冷や汗をかくばかりだった。

艦の武装についての説明中も、はじめ水雷と言ったのを機雷と言い直しながらも、通訳は自信が持てず言葉じりをにごしてしまった。

まわりの幹部たちはあつけにとられ、顔を見合わせた。

金正日国防委員長はいたわるような目を通訳に向け、笑って言った。

「これは機雷でなく、爆雷というものだ。それからさっきあそこで見たのは音響探知機というものだ……」

金正日国防委員長は随員たちを振り向き、駆逐艦の使命と武装について説明した後、まわりに停泊している大小の艦艇を指して、それらの種別名称やトン数、使命を具体的に教えた。そしてこう続けた。

現代の海戦では海上に浮かぶ軍艦より、水中の潜水艦の方がより大きい危険な対象である。そこで、艦隊の中で駆逐艦は敵潜水艦の撃破に大いに利用されている。駆逐艦には音響探知機が装備されているので敵潜水艦の位置を確認でき、位置が分かれば、水中に爆雷を投下して潜水艦を爆破する。……

燕窩「論争」

1983年6月、金正日国防委員長が乗った列車は青島を後にして南京へ向かっていた。

途中の食事に燕窩湯が出されたが、その料理を置いて「論争」が繰り広げられた。

燕窩湯は中国でたいそう珍重される高級料理で、貴賓にのみ出されているという。燕窩とは、中国南方の木や草の一切ない砂利で覆われた島に棲息する特殊なツバメの巣で、これをもとにして作った料理を燕窩湯または燕窩菜と言っている。

この草木も土壌もない砂利の島で、ツバメは何をもって巣を営むのであろうか。

これが話題となって、一同の間に「論争」が交わされたのである。

朝中両国の幹部を巻きこんだこの「論争」ではさまざまな主張が出されたが、大まかに言ってそれらは二つの意見に色分けされた。

一つはツバメが唾液をもって作るというものであり、今一つはツバメが小魚をくわえてきて巣を作るというもので、互いに主張を譲らなかった。

金正日国防委員長は彼らを見回して、以前、朝鮮の代表が中国を訪れた際に出された燕窩湯に魚の目玉が混じっているのを見たという話を聞いたことがある、と一言言った。

すると随員の一人が、「そうです。確かにそんなことがありました。魚の骨屑もありました」と口を添えた。国防委員長が笑い、みんなも笑った。

燕窩湯「論争」はその後、上海から北京に向かう列車食堂で再燃した。

金正日国防委員長は、まだ論争が収まっていなかったのか、もう中国訪問日程も終わりに近づいているから、この問題にもけりをつけるべきではなかろうか、と前置きして、自分の考えでは、ツバメが魚をくわえて来て、それを唾液でこねて巣を作っているようだ、こうしてみると、これは結局双方の意見の「折衷案」となろうが、この「折衷案」が正しいようだ、と言って豪快に笑った。

「その折衷案が正答のようです」

「そうです。金正日同志が燕窩湯『論争』を立派に締めくくって下さいました」

両国の幹部たちは手を叩いて愉快に笑った。

通訳と支配人のミス

中国を訪問していた金正日国防委員長は、1983年6月7日、上海市のある缶詰食品工場を訪れた。

金正日国防委員長は、食品工場では滅菌消毒がとりわけ重要だが、この工場では缶の滅菌消毒をどう行っているのか、と尋ねた。

「セ氏120度で8分間消毒します」

「セ氏120度？」

金正日国防委員長は首をかしげて、「それより4～5度は高くなければいかんのだが……」と独りごちた。

あわてた通訳は、工場の幹部に温度が何度だったのかと聞き直し、顔を赤らめて前言を訂正した。

「私の通訳にミスがありました。温度はセ氏124度だとのことです」
機械の騒音で説明を聞き違い、ミスをしたのであった。

金正日国防委員長はうなずいて、そう、セ氏124度で8分間なら十分に消毒されるだろう、と言った。

その時、随員たちは数日前青島ビール工場を訪れた際にあったことが思い浮かんだ。

その日国防委員長は、ビール缶の内壁にはどんな防腐剤が使われているのか、防腐剤を使うとビールの味が変わらないだろうかと、支配人に尋ねた。

専門家が行うような質問を矢つぎばやに浴びせられて支配人はつい、ビールの味は変わらないと答えてしまった。

国防委員長は、本当にそうかと聞き返した。

支配人は国防委員長がこの分野に博識だということを知り、てれくさそうに笑いながら前言を取り消した。

「実は、ビールの味がちょっとばかり変わります。今わが工場では、解決に努めています」

金正日国防委員長は豪快に笑った。

午餐会が終わる時に

2011年5月、中国側は、中国を訪れた金正日国防委員長を歓迎して観光名所である鏡泊湖上の遊覧船内で午餐会を催した。

時間は流れて午餐会が閉会を間近にしていた頃だった。

午餐会の終わりを飾って牡丹江市民族楽団の公演が行われ、ここでは中国の歌に続いて朝鮮の歌も熱っぽく歌われた。

微笑して拍手を送っていた金正日国防委員長は、ふと、琴を弾いている女性演奏家の指先の琴づめに目を止め、あれは何かと中国人幹部に聞いた。

「熱帯の海に棲むタイマイの甲羅で、べっこうと呼ばれているものです」

「べっこうとね。だから今は人間の爪で弦楽器を演奏していた時代は過ぎてしまっているわけですね。すばらしい歌をいろいろとお聞かせいただいて感謝します」

にこやかに語る金正日国防委員長に向かって、黒竜江省の一幹部が言葉をかけた。

「金正日同志、琴をもって中国の名曲を今一曲演奏してご覧に入りたいのですが、いかがでしょうか」

「他の歌ならともかく、中国の名曲ならどうして時間を惜しみましょうか。聞いてみましょう」

彼は喜んで女性演奏家に目くばせした。

琴独特の音が流れ出し、聞く人たちの興趣をそそった。

ところが、メロディーに耳を傾けていた金正日国防委員長が、幾小節も聞かずに、これは中国の名曲ではない、と言った。

思いがけない指摘に人々は驚いた。舞台の演奏者たちも同様だった。金正日国防委員長は笑って言った。

「これはイギリスの名曲です」

「あっ、そうですか。私はずっと、中国の名曲だとばかり思っていました」

金正日国防委員長の深い音楽的造詣に舌を巻いた中国人幹部は、てれくさそうに頭をかいた。

3. 気高い信義

延ばした故宮の参観

1983年6月、北京での初日の日程を終えた金正日国防委員長は、随員たちを呼んで、どうしても参観日程を変更しなければならないようだ、明日の午後に予定されている故宮の参観を地方の参観が終わった後にすることにしよう、中国側と話し合ってみるように、と言った。

随員たちは意外の指示に訳が分からず、予定された行事の日程を変更するのだから、大変重要なことがあるだろうとばかり考えていた。

ところが、金正日国防委員長は、同行した抗日革命闘士である人民武力部長の健康を案じて、祖国を発った時からずっと列車に揺られた上に、翌日の北京の気温が今日よりも上がることだから彼の体にこたえるだろう、だから故宮の参観を後回しにしようと言いい、こう続けた。

「われわれは老革命家たちを大事にし、彼らの健康に気を配らなければなりません」

その日、景山公園の高所に上る時にも国防委員長は、今日は暑くて山に登るのに骨が折れるだろう、あまり無理しないで途中で休むように、と闘士をいたわった。

国防委員長は、祖国を発つ時にも高齢で健康がすぐれていない彼に担当看護婦を別に付き添わせ、特別列車に彼のための専用車両を

つけるようにはからったのである。

随員たちは中国側に故宮の参観を延ばすことを提起した。

それは慣例を破った特別な要請であった。

一老革命家の健康のために指導者が参観の日程を変更させるのを初めて目撃した中国の関係者たちの衝撃は大きかった。

勧誘と拒絶

1983年6月、地方参観のために北京駅を出発する金正日国防委員長を中国共産党中央委員会総書記が同行した。

彼はヨーロッパ諸国の訪問を終えて帰ってから間もなく、それに第6期全国人民代表大会第1回会議を前にして非常に多忙な日々を送っていた。

そうした事情をよく知っていた金正日国防委員長は、当該幹部を通じて、仕事に忙しい中国党総書記が地方参観に同行しないようにという意向を中国側に重ねて伝えた。

そのつど中国党総書記は、当初の決心通りに金正日同志と一緒に必ず青島と南京へ行くつもりだ、そこへ行って新しく建設された金陵飯店も見せ、金正日同志に喜んでもらいたい、といって聞き入れなかった。

地方参観に発つ前にも、金正日国防委員長は三度も中国党総書記に仕事が忙しいだろうから、自分は下部の幹部たちと共に地方参観に行きたい、と言った。

「それはいけません、金正日同志。一度決心して決めた問題は変

更できません。南京までは必ず同行します」

金正日国防委員長は自分の意向通りにしようと再び勧誘し、こう言った。

「それなら協議して本来の計画を変えることもできるんじゃないですか」

「私に強要するつもりですか」

「強要ではなく、協議してみてもどうかということです」

「今再び協議して決定するには挙手採決が必要です。総書記に拒否権がある以上、私はその時に拒否権を行使するでしょう」

中国党総書記は今にも拒否権を行使するかのよう両手を振って見せた。

こうして、中国党総書記は金正日国防委員長と一緒に列車に乗ったのである。

鄧穎超の感激

「金正日同志が私の家まで訪ねて来られたので、この家と庭園に友好の光が差しています」

1983年6月、中国を訪問中だった金正日国防委員長が周恩来の夫人であり、中国人民政治協商会議全国委員会主席である鄧穎超の私邸を訪ねた時、高齢の彼女が喜びにあふれて言った言葉である。

金正日国防委員長が挨拶を述べようとして席から立ち上がると、鄧穎超は急いで腰を上げて、金正日国防委員長の手を取って座って話すよう促した。

それでも金正日国防委員長が座ろうとしないと、鄧穎超はそれでは自分も立っていると言って立ち上がった。

今度は金正日国防委員長が立ち上がった鄧穎超に座るよう勧めた。金正日国防委員長は鄧穎超に引き止められて仕方なく座ってこう言った。

「私が中国に来る時、金日成主席は鄧穎超同志に自分の心からの挨拶とお見舞いを伝えるように、と言われました。

金日成主席は、鄧穎超同志がもうお年を召しておられるのでお体の具合はどうかとても心配しております」

鄧穎超の目からは涙がこぼれ落ちた。

4年前、彼女が朝鮮を訪問した際、金日成主席は自ら空港まで出向いて迎えた。

主席は盛大な歓迎宴を催し、自ら演説を行い、彼女と共に咸興へ行って興南肥料連合企業所に建てられた周恩来総理の銅像と記念碑の除幕式にも臨席した。

その時、鄧穎超は最も近い革命同志であり戦友である周恩来の姿を朝鮮で再び見ることができた喜びと感激にひたり、主席に心から感謝の意を表した。

金正日国防委員長は鄧穎超に、周恩来同志は偉大な革命家であると述べ、彼が朝中友好のために多大な功績を残したことを熱く回顧した。

「朝鮮人民の偉大な領袖であり中国人民の親しい友である金日成同志が、周恩来同志と結んだ同志的関係を忘れず、私に深い関心を寄せてくれていることに対し非常にうれしく思います。私は金正日同志が今しがた述べられた言葉を永遠に忘れないでしょう」

鄧穎超の頬は涙に濡れた。

何と感動的な光景であったか、中国側の通訳は涙にむせんで満足に通訳することができず、朝鮮側の通訳が通訳しなければならなかった。

やがて別れる時間になった。

鄧穎超は金正日国防委員長が重ねて遠慮したにもかかわらず、家まで訪ねて来られた最も大切なお客を戸口で見送ることはできないと言って庭先まで出て来た。

別れ際、鄧穎超は金正日国防委員長の手を強く握って言った。

「金正日同志が私の家に来られたことは最も慶賀に堪えないことです。これからもたびたびお出でください」

金正日国防委員長の車が見えなくなるまで、彼女は手を振り、その場に立ちつくしていた。

10分と2時間

1983年6月、金正日国防委員長は北京の中南海で鄧小平・中国共産党中央顧問委員会主任と会見した。

鄧小平は金正日国防委員長が中国に到着した初日に、既に関係部門の幹部に金正日国防委員長の安否を尋ね、一日も早く会いたいという気持ちを表明していた。

彼は金正日国防委員長の手を取って長らく放さなかった。その席上には中国の古い幹部がみな参加していた。

金正日国防委員長は、鄧小平同志をはじめ中国の指導幹部たちが

全国人民代表大会の開催で多忙な時に、そして高齢の身でも不便をいわずに会って下さって挨拶できるようになったことをうれしく思うとし、金日成主席からの挨拶とお見舞いを伝えた。

そして、鄧小平同志が中国革命の開拓期から社会主義の現代化建設を推し進める今日に至るまで、中国革命の卓越した指導者として大きな業績を積み上げたことについて、金日成主席と結んだ同志的友情を非常に大事にし、終始一貫朝鮮人民の革命闘争を強く支持・声援していることに謝意を表した。

この日の金正日国防委員長と鄧小平の談話は40分以上かかった。

談話が終わった後、鄧小平は金正日国防委員長のための午餐会を催した。

金正日国防委員長は中国同志たちの誠意に謝意を表した。

談話に続いて午餐会が長引いたので、時間はかなり流れた。

金正日国防委員長はあまりにも長い時間になってすまないとし、次のように述べた。

「祖国を発つ時金日成主席は、鄧小平同志に会うと健康を案じてあまり時間をかけずに10分ほど話を交わすようにと言われましたが、それを守れなくなったので、帰って何と報告したらよいか分かりません」

鄧小平は深い謝意を表しながら言った。

「私はこんなに大事なお客に会って楽しいから、健康はもっとよくなり、長生きすることができます。帰ったら金日成主席同志に事実通り話してください」

このように、この日の鄧小平との対面は10分ではなく2時間以上も続いたのである。

4. 人民に思いを馳せる

農場でも宴会場でも

2011年5月、鏡泊湖を見て回った金正日国防委員長は、すぐ3時間もの間車を走らせて牡丹江市海林農場を見学した。

海林農場は、1950年代に「北大荒」の開墾を提唱した中国共産党のアピールに応じて駆けつけてきた開拓者たちの誠実な努力によって設立され、今日は中国の主要穀物・畜産物生産拠点に変わった農場である。

農場の管理事務所で総合的な説明を受け、若い夫婦が住んでいる農家に案内された金正日国防委員長は、家族は何人か、住宅の建坪はどれくらいで、家はいくら払って買ったのか、メタンガスで炊飯をするとのことだが火力は強いのかなどと詳しく聞き、家庭の未来を祝福した。

ついで乳牛牧場に足を運んだ金正日国防委員長は、牧場の生産と運営について具体的な質問をした。

「この牧場では主にどの品種の乳牛を飼っているのですか」

「オーストラリアから輸入したホルスタインを飼っています」

「乳牛1頭当たりの1日の飼料単位はどれほどですか」

「乳牛1頭は日に20キログラムの飼料を食べ、30キログラムの牛乳を出します」

「20キログラムを食べて30キログラムを出すんですって？」

金正日国防委員長は不思議そうに相手の顔を見つめた。

彼は、おっと言って答え直した。

「日に20キログラムではなく30キログラムの飼料を食べ、30キログラムではなく20キログラムの牛乳を出します。30キログラムの飼料のうち10キログラムが穀物飼料です」

こう答えながらも彼は、やはり今度も金正日国防委員長の質問に合った返答をしていないということ、つまり飼料単位について質問しているのに、飼料の量と勘違いして答えていることに気づいていなかった。

金正日国防委員長はただ笑っただけで、質問を続けた。

乳牛の品種の拡大再生産はどんな方法でなされているのか、乳牛の年間淘汰率は何パーセントか、穀物飼料は主に何を与えているのかなどと聞いた金正日国防委員長は、こう言った。

「この乳牛牧場は、全的に環状循環生産システムで運営されていると言えます」

「そうです、金正日同志」

金正日国防委員長は農場が今後も経営活動を絶えず改善し、さらなる成果を収めるものとの期待を表明した。

この日の夕方、牡丹江市のあるホテルで宴会が行われた。

宴会で中国の中央と省の責任幹部は、金日成主席は1930年代に東北で抗日武装闘争を展開し、鏡泊湖に血戦の足跡を残した、今日、金正日同志は中朝友好の根源と伝統を示す象徴である鏡泊湖で金日成主席の偉大な業績を振り返り、われわれと共に温かい友情を分かち合い、中朝友好の美しい未来を設計しておられる、これはわれわれを大いに感動させ、奮発させている、両党の最高指導者の崇

高な志を体して新しい世紀、新しい情勢の要求に即して中朝友好・協力関係を代を継いで発展させていくことは、われわれみなへの聖なる責任であり義務である、と真情を吐露した。

彼らの真心に謝意を表した金正日国防委員長は、ふと省党書記を呼んで静かに尋ねた。

「私は今日、農場の住宅を見て回った際、質問できなかったことが一つあります。農場の住宅では暖房をどういうふうにしているのですか。もしかしたら電気暖房ではありませんか」

愉快に進んでいる宴会の雰囲気とはちぐはぐな農場住宅の暖房問題についての思いがけない質問に省党書記はおやっと思ったが、それが人民の生活に対する深い思いやりに起因した質問だと思い当たったのか、目を輝かせて答えた。

「電気暖房ではありません。乳牛牧場の後ろに6000キロワットのメタンガス発電所が一つありますが、そこから出る余熱で蒸気を作り、農家の暖房を行っているのです」

「ああ、そうですか。すぐれた経験です」

金正日国防委員長はこくりとうなずいた。

宴会場で確かめた農村住宅の暖房問題……。

祖国でも外国訪問の道でも金正日国防委員長の心の中にはいつも人民のみがあり、もろもろの思索も愛する祖国人民により文化的で豊かな生活を享受させることに志向されていた。

絶勝は待っているけど

2011年5月、金正日国防委員長は中国華東地域の江蘇省楊州市を訪ねた。

長江に発して中国の北と南の地域を結ぶ大運河の沿岸にある楊州市は、風光にすぐれた有名な観光地であり、1991年10月、金日成主席が最後の中国訪問時に訪ねた意義深い都市である。

金正日国防委員長は、一日中この市にとどまり、多くの単位を参観し、宴会にも出席した。

中国関係部門の幹部たちは、金正日国防委員長を秀瑞湖に案内しようとした。

楊州市の秀瑞湖はさして大きくない湖であるが、風致秀麗の絶勝である。

その名に秀麗でみずみずしい美人だという意味がこもっているこの人工湖を、中国の歴代の皇帝が訪れたものとされているが、清の乾隆皇帝は6回もここで遊んだという。

この湖にも、中国を訪れた金日成主席が遊覧船「乾隆」号に乗ってその風致を楽しんだといういわれもある。

楊州市では金正日国防委員長をここへ案内すべく、いろいろと誠意を尽くした。

バッテリー車の通行の妨げになる杭の欄干をすべて抜き取り、花園も一段と美しく手入れし、一切の観光客の出入りを禁止した。

秀瑞湖の参観はその日の午後に予定されていた。

ところが、金正日国防委員長は秀瑞湖の遊覧には随員たちだけを送り、自身はスケジュールに予定されていない花潤蘇果スーパーマーケットを視察した。

金正日国防委員長は、果物や野菜、冷凍食品、菓子、牛乳製品の売り場などを一つひとつ見て歩き、商品の種類と品質、スーパーマーケットの経営方式について具体的に把握した。

古色蒼然とし風光にすぐれた楊州にやって来る人なら誰でも訪れる秀瑞湖は、「秀丽でみずみずしい美人」の姿を誇って金正日国防委員長の来訪を待ち続けたが、金正日国防委員長は祖国の人民の生活に思いを致してスーパーマーケットへの道を選んだのであった。

その日の夕方、また翌朝楊州市を発つことになった時も、市党書記が金正日国防委員長を秀瑞湖に案内できなかったことでひどく残念がると、金正日国防委員長は、今後またお国を訪れる機会にはここ楊州へ来てきっと秀瑞湖を遊覧すると約束した。

楊州市党書記は朝鮮の幹部たちにこう語った。

金正日同志はスーパーマーケットを参観する時、2階の売り場をすっかり見た後、足を返して食用油売り場をもう一度見ようと言うので同行した人たちはいぶかった。金正日同志は楊州市の人たちが普段どんな食用油を好んで使っているかを聞いた。私が一体に大豆油が好まれていると答えると、大豆油瓶を手に取り、精製品かどうか、どんな商標なのかなどとこまごまと確かめてみた。外国訪問の道で平凡な人民の利用する商店まで訪れて人民生活に関する問題に深い関心を払う金正日同志の姿を仰ぎ見ながら、金正日同志は真の人民の領袖だということをいまさらのように感じた。

北京に向かって出発した列車で中国国务院の戴秉国国务委員も、金正日同志は楊州へ行って秀瑞湖を遊覧できませんでしたが、楊州市では秀瑞湖の周辺に絶対に高層ビルを建てないよう統制しています、だからそこへ行けばあたかも大自然の中にいるかのような感じがします、秀瑞湖の大自然の中へ金正日同志を案内できず、少しでもゆっくり休んでももらえなかったことが悔やまれてなりません、と語った。

金正日国防委員長は、楊州は優雅かつ文化的であり、古典美と現代美が調和をなした都市だと言える、長い歴史と文化伝統をしっかりと保存し、さらに発展させるために努力しているのはよいことだとし、笑みをたたえてこう述べた。

「今度秀瑞湖を見ることができませんでしたが、見残しておく対象があつたら、この次にまた行くという口実を設けることができるのではありませんか」

「金正日同志が今度また来られて秀瑞湖を必ず見たいと言われたことを、私が楊州市の幹部たちに伝えます。そうしたら、たぶん彼らは非常に喜ぶでしょう」

5. 不思議な自然現象

天の配剤（1）

2010年5月初め、金正日国防委員長が中華人民共和国に対する非公式訪問を行った時のことである。

国防委員長の中国東北地域の2番目の訪問地である天津市は中国の4大直轄市の一つであり、国防委員長が視察する天津港は世界では5番目、その国では3番目に大きい港である。

国防委員長が2日間にわたって視察した大連市とは違って、天津市では前日から雨が降り注ぎ、強い風まで伴った豪雨は未明にも降り続けた。

ところが、国防委員長が天津駅に到着する頃には、市の中心部だけ雨が止んだ。しかし、国防委員長が視察することになっていた海岸の港区域ではなお雨が降り続き、埠頭は一面水浸しだった。そこで中国側は、国防委員長が車の中で埠頭を視察するようにと考えた。

ところが、思いもよらぬ事が生じた。

国防委員長が港の総合ビルで港の沿革と展望図、建設模型の説明を受けてから埠頭の方へ向かうと、その先の方から急に雨が止んだ。

同行した中国側の幹部たちは驚きを隠しきれなかった。そして、車の中で視察しなくても済むようになったとほっとしていた。

国防委員長は東港コンテナ埠頭と建設中の国際旅客埠頭を見て回り、中国の幹部から具体的な説明を聞いた。

彼は、海の底を20メートルほど掘って大型貨物船が出入りできるようにし、国際旅客埠頭の建設もそのようにするつもりだ、と説明した。

すると、国防委員長は壮大な自然改造事業だと評価し、天津港の建設過程を見ても人間の力がどれほど大きいかを再び深く認識することができた、と述べた。

金正日国防委員長が二つの埠頭を見て回るのに40分ほどかかった。

その間、近くの海上では雨が降り続いたが、参観コースには全然雨が降らなかった。

国防委員長が参観を終えて車に乗り港を後にすると、また埠頭に雨が降り始めた。この日の不思議な自然現象について中国人たちはこう言った。

まったく驚くべきことだ。朝鮮では金正日同志にまつわる不思議な自然現象を伝える文が多く報じられているが、今日の雨降りもただの自然現象と見るべきものではない。天の配剤としか他に言いようがない。……

大日照りの末に降った雨

2011年5月、金正日国防委員長が再び中国を訪問した時のことである。

その年の春、中国では例年になくひどい日照りが続いていた。

小さい川はほとんど乾いてしまい、大きな河川と湖水の水量もはなはだ減った。

ひどい日照りのため、金正日国防委員長が参観することになった鏡泊湖の水位が低くなり、遊覧船を岸に横づけられないほどだった。

それで中国側の幹部たちは、金正日国防委員長に湖水の美しい景色を見てもらえないのではと苛立っていた。

黒竜江省の関係者たちは、非常対策として岸から遊覧船まで数十メートルの栈橋形式の足場を作り、遊覧船の2階に上る狭くて急な階段も広くて緩やかに作り直した。

彼らは雨の降らない天気を恨みながらも、それ以上天の偶然を望まなかった。

ところが、金正日国防委員長が湖水を訪れる数日前から東北地方に多くの雨が降り始め、鏡泊湖の水位は1日平均60センチぐらいつつ高くなった。

中国屈指の観光名所の一つである鏡泊湖は、水面が鏡のように穏やかだという意味を込めている。長い大日照りの末に降った雨で山河がきれいに洗われ、その景色は秀麗の極致をなしていた。

天の配剤（2）

2011年5月、金正日国防委員長が中国華東地域の江蘇省楊州市を訪れた時のことである。

楊州市でも3カ月の間大日照りが続いた。

5月の昼の気温が36度まで上がり、人々は息が詰まり、背筋に汗が流れる猛暑に苦しんでいた。

「まったくひどい暑さだ。空の水がめが全部乾いてしまったようだ……」

人々を嘲笑うかのように炎熱を降り注ぐお天道様に向かって、拳を振りかざして恨む人もいたが、雨は降る素振りも見せなかった。

ところが、金正日国防委員長が楊州市に到着する日に大量の雨が降り始めた。

翌日、国防委員長が市内参観を始めると、気温がさらに下がり、涼しいそよ風が吹いた。

金正日将軍がそよ風を吹かせた！

職場でも、村でも、人々がささやき合った言葉である。

金正日国防委員長が鏡泊湖を見て回る数日前から多くの雨が降り、低くなった水位が急激に高くなった事実を目撃し、天の配剤だと驚きを隠さなかった中国のある幹部は、朝鮮側の幹部にこう語った。

「朝鮮人民は金正日同志を天が賜わった方だとたたえているが、まったくその通りです。今年楊州市には長い間雨が降らず、日照りが続いて人々が大いに心配し、昼の気温が数日間も36度まで上がるむし暑さが続きました。ところが、金正日同志が楊州市に到着する日、多くの雨が降り、気温が下がって市民は大喜びしています。これもやはり単なる自然現象ではなく、確かに偉人を見分ける天の配剤としか思えません」



朝口親善の 日々に

1. 厚い人情味と信義

ウマラトワの激賛

サージ・ザインジノフナ・ウマラトワは、ロシアの平和・統一党の委員長である。

1999年2月、金正日国防委員長は白頭山麓で、正義感の強い情熱的なこの女性政治活動家に接見した。

この日北国の寒さはとりわけ厳しかったが、国防委員長は宿舍の外へ出て彼女を迎え、こんな遠くの地へ御足労願って申しわけありません、と挨拶した。

ウマラトワは誕生日を迎えた金正日国防委員長にお祝いを述べ、今年お国を訪れて、貴国のすべてが昨年よりいっそう活況を呈していることを知ったと述べた。

国防委員長は、今朝鮮人民は強国建設を合い言葉にして、すべての問題を自力更生の革命精神をもって解いていこうと奮闘している、とりわけ食糧問題の解決をはかってジャガイモの栽培に力を入れている、以前、ソ連はソ独戦争の際、シベリアにジャガイモを大々的に植えて飢饉を克服し、ヒトラー軍との戦いに勝利した、と語った。

ウマラトワは、自党とロシア諸政党の活動状況に関する私見を述べた。

彼女の言葉を注意深く聞いた国防委員長は、自身は、いかなる大敵を相手にしても恐れることなく、やるならやってみようという胆

力をもって立ち向かう人が一番気に入るとし、次のように述べた。

私はそれが誰であれ、わが国をあなどり、尊厳を冒そうとするならば、毫も容赦しない。そのようなやからとは乾坤一擲の決断をもって戦って勝利すべきだというのが、私の信念であり、意志である。アメリカ人はわれわれのこの信念と意志に氣勢をそがれ、あえて手出しできないでいる。万一、それでも手を出せば、断じてけりをつけてみせるというのが私の腹だ。白頭山で戦った抗日遊撃隊は武力が強くて日本の百万の大軍と戦って勝ったのではない。不屈の革命精神をもって戦い、勝利したのである。白頭山の革命精神さえあれば、いかなる大敵を相手にしても恐れることはない。……

国防委員長は、よもやま話では冗談もまじえて対話を進めたが、帝国主義者と革命の背信者に対しては強い怒りをこめて罪業を断罪した。

その日、ウマラトワは朝鮮の一幹部に自分の所感を語った。

「金正日同志は、卓越した政治家、偉大な軍事戦略家であり、天の降した偉人です。

金正日同志は、気性と信念も、意志と気骨も白頭山にそっくりです」

ひんぱんに来たら友情も厚くなる

海上での午餐

朝鮮をたびたび訪問しているシベリア生まれの一ロシア人士は、旧ソ連時代にシベリアの某州党委員会第1書記を務め、のちにソ連

共産党中央委員会の要職にあった古くからの政界人で、鷹揚ながらも気骨のある人物だった。

1999年8月のある日、金正日国防委員長は訪朝中の彼を朝鮮東海上の船に招いて、昼食を共にした。

前日、国防委員長は当該幹部に、先年、今度来たら一緒に休息を取ろうと約束したのだったが、現地視察のスケジュールが詰まっていて時間が取れない、今回私に会えずに帰ることになったら、どんなにか残念がるだろう、明日の午前、彼が泊まっている東海岸休養地の前に船を浮かべて招待し、昼食を共にしたいから準備をしてもらいたいと指示した。

ところが、气象台に問い合わせてみると、明日は大雨が降り、風も激しいという。

国防委員長は、波が高く風雨の激しい海上で昼食を取れば、むしろ深い印象を残すだろうから悪くはない、気にしないで昼食の用意に抜かりがないようにと念を押した。

海上の昼食に招かれたロシア人客は、事情を聞いて感激した。

それに、彼をいっそう感動させたのは、テーブルに着いた時、国防委員長が、今度来られたら休息を共にしようと約束しておきながらも、スケジュールに縛られそうできなくて申しわけない、今日以外に会える機会がなさそうだから、悪天候を承知の上で戦闘的に昼食を準備したから、印象深く追憶してほしい、こんな日はお酒の味も格別だろう、と言って見覚えのある酒瓶を食卓に出した時だった。

「おや、それはグルジアコニャックじゃありませんか」

「先年あなたから頂戴した物です。一人で飲んでは味気ないので、今度あなたに会ったら一緒に飲もうと思って取っておいたの

です。今日こうしてお会いできた記念に飲みましょう」

笑顔でこう言った国防委員長は、瓶の栓を抜き、お客の杯に注いだ。

自分が贈ったグルジアコニャックを大事にしまっておいて贈り主の自分に先に注いで下さることにとまどい、彼は、手を出すのがはばかれた。

「どうなされたのです。シベリアの人たちはうれしい時にもお酒を飲み、悲しい時にもお酒を飲むそうじゃありませんか。さあ、一緒に飲みましょう」

こだわりなくひんぱんにおいでなさい

金正日国防委員長はある年、このロシア人客と数時間もの間談話を交わしたことがある。

その時、次のような対話が行われた。

国防委員長： 今度おいでになる時は一人で来ないで、ご夫人をはじめ一家全員を伴って来ると約束しなさい。

客： それは、ちょっと……。

国防委員長： そうされたらご夫人の手料理を賞味できるではありませんか。ご夫人の料理の点数は気前よく付けますから、心配せずきつとお連れになるのです。

客： 料理の採点などは気に掛けませんが、家族を全員連れて来るとなれば、一個小隊にはなりますが、この老いぼれが小隊長の役目を果たすのはちょっと骨が折れますから、何人かだけを連れて参りましょう。

国防委員長： われわれに負担を掛けるようでそうおっしゃるのかもしれませんが、歓迎すべき人たちなら小隊ならぬ中隊で

あってもおなかを空かせるようなことはしませんから心配御無用です。旅客機の切符は私が送って上げます。ところで、ご夫人の趣味はなんでしょう。

客：読書とオペラです。

国防委員長：それなら、平壤では『血の海』や『花を売る乙女』のような革命歌劇を見、ポチョンボ・エレクトロニック・アンサンブルの公演も存分に楽しむことです。ただ、われわれの気に入る客からは観覧料を高く取り、招かざる客からは安く取ることにしていますが、二の足を踏むようなことはないでしょうね。

座中に笑いの声が卷いた。

ウィットに富んだユーモアと冗談を混ぜて言う国防委員長の達弁に時間が経つのを忘れていた客は、ふと、自分があまりに長居していることに気づいて恐縮した。

金正日国防委員長は、そんなことを気に掛けなくてもよい、私は時間を取られても補うすべを心得ている、今後とも平壤へはわが家と心得て、こだわりなくひんばんにいらっしゃい、そうしたら友情も厚くなる、と言った。

「ありがとうございます。きっとまた参ります」

昔の偵察兵の決断

金正日国防委員長が朝鮮を訪問した以前のソ連作家同盟第1書記だったカールポフに会った1999年9月のある日のことである。

数年前、旧ソ連の国防相だったヤゾフと共に朝鮮を訪問し、数回も金正日国防委員長の接見を受けて深い縁を結んだ彼は、どう挨拶の言葉を述べてよいか分からなかった。

第2次世界大戦の時期には赤軍の偵察小隊長を務め、ファッショ・ドイツ侵略者を打ち破る戦いで勇猛を馳せて20代にソ連英雄称号を受けた参戦老兵であり、戦後には偵察兵時代の体験をもって軍事テーマの長編実話小説『司令官』や『生け捕り』などを書いたが、今は70歳の峠を越えた涙もろい老人である。

彼のそのような気持ちを察した金正日国防委員長は話題を変えて、この休養所の初の来客はノビチェンコだったが、彼が死亡してもう来られなくなり、その代わりにカールポフ同志のようなロシアの友人たちが訪ねてきたことを本当にうれしく思うとし、毎年お出でになってほしいと言ったのになぜ来られなかったのかとたいそう残念がった。

国防委員長の言葉に緊張がほぐれたのか、カールポフは顔をほころばせた。

彼は、今執筆中の『スターリン大元帥』を脱稿できずに一年、二年と延ばしていますが、スターリンの業績を叙述した「軍事戦略家」という章だけでも金正日国防委員長に先にご覧に入れたと思います、と語った。

すると、金正日国防委員長は満足し、スターリンを偉大な軍事戦略家として押し立てようと決心したのは実に偵察兵らしい勇敢な決断だと褒めた。

金正日国防委員長は、次のように語を継いだ。

ロシアの日和見主義者や裏切り者がスターリンの歴史的功績をこ

き下ろそうとあらゆる悪宣伝をしたので、歪曲された歴史を正し、新しい世代の青年たちに正確な認識を与えるためにも図書『スターリン大元帥』をよく書かなければならない、その本が2000年代を迎えて発行されるものだから意義があるだけでなく、特にソ連の崩壊後あなたが純粋な作家の立場に立って客観的に書く本だからもっと意義がある。……

「期待に背かず立派な文章を書きます」

カールポフの決心を聞いた国防委員長は、人民大衆を自覚させて闘争に奮い立たせる上で作家は先覚者にならなければならないとし、人民大衆の力を信じ人民大衆に依拠して革命を行ってこそ勝利することができると言うことがほかならぬチュチュエ思想だと強調した。

真摯な談話が終わって別れる時、老兵はたいそう残念がり、「くれぐれもご健康を祈ります」と喉を詰まらせた。

国防委員長は両腕を広げて彼を抱擁し、老兵はその懷に顔を埋めて肩を震わせた。

国防委員長は彼をなだめながら、こう言った。

「勇敢な偵察兵が泣くなんて……。私の名であなたの息子や娘たちを公式に招きますから、今度は休暇期間を約束してみな一緒に来てください。そして、なにとぞお体に気をつけてください」

カールポフは感激のあまり、語を継ぐことができなかった。

帰国する日、彼は朝鮮の幹部たちに、ロシアへ帰っても金正日国防委員長のみを心の柱として生きる弟子になり、あくまで金正日国防委員長に従うという自分の真情を吐露した。

レーニン廟を訪ねて

2001年8月、モスクワの赤の広場で一つの衝撃的な出来事が起こった。

ロシア訪問中の金正日国防委員長がレーニン廟を訪ねて敬意を表したのであった。

その日の朝、幹部たちを呼んで当日の日程を話していた金正日国防委員長は次のように述べた。

「われわれは今日、無名戦士墓に花輪を進呈し、ついでレーニン廟を訪ねることになります」

幹部の胸は高鳴った。数日前、モスクワに向かって走る列車でのことを思い出したのである。

その時、一責任幹部が外交慣例の上で極めて慎重かつ鋭敏な一つの問題について国防委員長に話した。

それは、国防委員長がレーニン廟を訪ればどんな反響が起きるかということだった。

旧ソ連時代、レーニンの遺骸が安置されているモスクワの赤の広場はソ連の聖地であると同時に、世界革命の聖地と考えられていた。ソ連を訪問する社会主義諸国の党首脳や国家元首は決まってレーニン廟を訪ね、世界の労働者階級の偉大な領袖でありソ連共産党とソビエト国家の創建者であるレーニンに敬意を表することを一つの道徳的慣例と見なしていた。

しかし、ソ連の崩壊後、その慣例はなくなった。おおっぴらにレ

レーニンを中傷し冒瀆することが許され、レーニン廟をなくするという主張までまかり通っていて、政界と社会各界では鋭い政治的摩擦が頻繁に起こった。

こうした厳しい情勢下にあつて、国防委員長がレーニン廟を訪ねることについて責任幹部たちは憂慮せざるを得なかった。

しかし金正日国防委員長は、誰が何と言おうと今回の訪問期間に必ずレーニン廟を訪ねるつもりだ、ソ連の崩壊後、多くの国家元首や党首脳がロシアを訪問したが、レーニン廟を訪ねた人は誰もいない、私は外交慣例やどんな条件にもこだわることなく、領袖に対する真の革命家の道徳的信義をもってレーニン廟を訪ねるつもりだ、私がレーニン廟を訪ねることについてとやかく言う者があれば、それが誰であれ、道徳的信義に欠けた低劣な人間であることを自ら暴露することになるだろうと言って、次のように強調した。

珠は泥水の中でも光を放つものだ。世界の労働者階級の領袖の墓が雑多な思想によって見捨てられ冒瀆されている時に、われわれが堂々とレーニン廟を訪ねたら、真の共産主義者の気高い道徳的信義がどのようなものであるかを思い知るようになり、それが全世界に誇示されるだろう。……

こうして、モスクワでの初の日程としてレーニン廟を訪問するという国防委員長の意志が表明されたのである。

金正日国防委員長は随員たちを見回しながらきっぱりと言った。

「誰が何と言おうと、われわれは計画どおりレーニン廟を訪ねるべきです」

金正日国防委員長がクレムリンの宿舎を出たのは午前10時頃であった。

国防委員長を乗せた車がレーニン廟のある赤の広場に到着した時、随員たちは驚きを禁じ得なかった。

ロシア側はその日の朝までレーニン廟訪問の形式について知らせてこなかったのに、いつの間にか迎接の準備を整え、儀仗隊まで整列させていたのである。

それまで10余年の間どの国の党首脳も国家元首も訪れたことのない赤の広場のレーニン廟、儀仗隊の「1号哨所」もなくなり、ひっそりかんとしていた広場が、この日は盛大な行事の雰囲気包まれていた。

真夏の日差しが照りつける舗石を踏みながら、国防委員長は肅然とした面持ちでゆっくりとレーニン廟に向かった。

その前では、ロシアの若い軍人たちが国防委員長名義の花輪を携えて規律正しく歩を運んでいた。

それは短い距離ではあったが、ロシアと世界各地からやってきたジャーナリストたちが歴史的瞬間を逃すまいとせわしく動き回った。

軍人たちが花輪を下ろして一歩退くと、国防委員長は花輪に近寄ってリボンをまっすぐにした。

リボンには「ウラジーミル・I・レーニンに 金正日」と書かれていた。

国防委員長は黙礼して敬意を表した。

国防委員長がレーニン廟を訪ねたニュースは全世界を沸き立たせた。

「20世紀の社会主義偉業の開拓者に対する21世紀の社会主義偉業の指導者の崇高な敬意は、世界の自主化偉業の領袖としての金正日同志の特出した道徳的信義を示した感動的な出来事である」

天も感心して涙を流す

2001年8月、ロシアのネバ川の岸边には明け方から雨が降った。

金正日国防委員長を随行してサンクト・ペテルブルグの訪問を終えた一行は出発の準備を急いでいた。午前中にそこを発つ予定だったのである。

ところが、朝食が済むと金正日国防委員長は、ここを出発する前にピスカリョーフ共同墓地だけにはきつと行ってみなければならないとし、そこへ行く準備をするように指示した。

共同墓地には第2次世界大戦の時期、レニングラード防衛戦で戦死したソ連軍の将兵と市民の霊魂が眠っていた。

今日の日程には墓地の訪問がなかったのに、と考える随員たちの頭には数日前の列車でのことが思い浮かんだ。

モスクワへ向かうシベリア横断列車の中で金正日国防委員長は、幹部たちにサンクト・ペテルブルグ訪問の意向を話しながら次のように述べた。

その都市は、金日成主席が生前に気高い国際主義的連帯を強め、歴史的訪問の足跡を残した意義深い所である。その都市にはレーニンの革命活動史跡と巡洋艦「アブローラ」号の砲声で10月社会主義革命の開始を告げた歴史が秘められている。レニングラードは第2次世界大戦時期、ファッショ・ドイツ軍とフィンランド軍による900余日間の封鎖に耐え抜き、勝利した英雄的都市である。レニングラード防衛者はレーニンの聖なる名を冠しており、10月革命にさ

さげた烈士の血がにじんでいる自分らの都市を敵に明け渡しては絶対にならないという決死の覚悟を持って最後まで戦った。そのため、サンクト・ペテルブルグは革命家なら誰もが無視してはいけない都市である。このような都市を私は必ず訪ねなければならない。サンクト・ペテルブルグの場合にしても、そこの人々は自分らの都市に宿っている10月社会主義革命と第2次世界大戦時期の闘争精神を忘れては絶対にならないであろう。立派な伝統と高貴な業績は正しく継承されなければならない。……

そうして、金正日国防委員長は伝統と継承の崇高な精神と意志、犠牲になった防衛者への追慕の念を抱いてその歴史の都市の訪問の連続として共同墓地を訪ねることにしたのである。

車の行列がピスカリョフ共同墓地の入り口に至った時であった。

金正日国防委員長が車を降りると急に雨が止み、周囲が明るくなった。

金正日国防委員長は花輪を丁重に持ったロシアの若い軍人たちの後をついて、「母—祖国」記念碑に歩を運んだ。

記念碑の前では「永遠なる炎」が燃え上がっていた。

リボンに「英雄的レニングラード防衛者に 金正日」と書かれた花輪を進呈し、都市防衛戦で犠牲になった人々を追慕して黙祷した金正日国防委員長は、訪問録に次のような親筆を残した。

「われわれはレニングラードの悲劇的な犠牲を永遠に忘れないだろう。

2001. 8. 7」

ところで、金正日国防委員長が車に乗ると、止んでいた雨が再び降り始めたのである。

金正日国防委員長の高潔な品格に天も感心して泣くのだろうか。

「乙女の春」を取り戻したコルツォーバ

2008年7月、朝鮮を訪問中のロシア「ベリョズカ」舞踊団の公演を観覧した金正日国防委員長は、彼らの公演成果を高く評価した。

国防委員長は、今日、ロシア「ベリョズカ」舞踊団の公演は上出来だったと称え、こう述べた。

「ベリョズカ」舞踊団は水準が高く、世界的にも広く知られている貫禄ある芸術団体である。「ベリョズカ」舞踊団の作品はみなロシア風の情緒が濃く、民族的かつ愛国主義的内容で一貫している。……

満足した面持ちで話していた国防委員長は、舞踊団のコルツォーバ団長に会った時のことを話した。

彼女はほとんど一生「ベリョズカ」舞踊団で芸術に携わっているロシアの有名な俳優であった。

若盛りの美しい彼女はソ連当時に名を馳せていた「ベリョズカ」舞踊団と共に優雅で特色のある芸術公演を行って国内外の数多くの観衆から人気を集め、当時に創作・上映された劇映画『乙女の春』にヒロインとして出演し、僻村の舞踊愛好家にまで広く知られていた。

だが、コルツォーバは年を取りながら次第に人々の記憶から消え去るようになった。

彼女ももはや70歳近くの老女になった。

こんな時に金正日国防委員長の招きを受け、舞踊団を導いて平壤

訪問公演の途につくようになったのである。

舞踊団指揮メンバーや俳優たちと会見した国防委員長は、コルツォーバ団長がソ連の劇映画『乙女の春』のヒロインを演じたことを回想し、テレビでその映画を放映するから、平壤に滞在している間に観ていくようにと言った。

その後、テレビでは実際に彼女の娘時代の姿が映し出された。彼女は2回も放映された『乙女の春』を観て夢を見ているような気持ちにとらわれた。

再び金正日国防委員長に会った時、コルツォーバは数年たてば齢70になるが『乙女の春』のヒロインを演じた時のように思っていたきたい、自分は今も共産党員証を持っている、と言った。

その後、コルツォーバはロシアの民族文化の伝統を守るために努め、毎年のように舞踊団の団長として朝鮮を訪れた。

金正日国防委員長の人間味が、人生のたそがれを迎えていたロシアの名優にも青春の活力を与え、創作熱意を取り戻してくれたのであった。

金正日国防委員長は感心した語調で述べた。

「『ベリョズカ』舞踊団はみなが立派な人たちです。……今、世界のどこにもアメリカ式がはびこり、西側の文化やロックミュージックに影響されている中でも民族的かつ愛国的な作品を引き続き創作・公演しているのは、『ベリョズカ』舞踊団が健全な芸術団体であることを意味します」

自分の国と民族を愛する人であれば、その心を大事にし、推し立ててくれる金正日国防委員長の配慮の下でコルツォーバは70の高齢に乙女の春を取り戻したのである。

2. 魅惑と欽慕

ヤゾフの感嘆

旧ソ連の国防相だったヤゾフはソ連軍部で「軍事百科事典」と呼ばれた博識な人だった。入隊して兵士生活から始めた彼は、小隊長、中隊長、大隊長、連隊長、師団長、軍団長、軍区司令官をへて国防相まで務め、軍事分野に精通していた。

いつかヤゾフは米国の国防長官だったカルシーと会って言葉を交わし、相手をびっくりさせたことがあった。

米国の南北戦争が話題になった時、彼はどの戦闘はどのように展開され、どの将軍はどんな役割を果たし、交戦双方の戦術的長所と弱点は何であったかを詳しく分析した。

カルシーは、米国の国防長官である自分よりソ連の国防相のヤゾフの方が米国の南北戦争についてより詳しく知っていることに大きな衝撃を受け、あなたは軍事百科事典だと感嘆した。

これはヤゾフの博学ぶりを見せるエピソードの一つである。それゆえ、彼は人々が自分を指して「軍事百科事典」と呼ぶことに対して誇りと思い、それとなく自負していた。

1998年7月某日、朝鮮を訪問していたヤゾフは金正日国防委員長との接見を受けた。

自ら宿所を訪ねた国防委員長はヤゾフにやさしく声をかけた。

「ようこそいらっしゃいました。ご機嫌はいかがですか」

「尊敬する金正日同志、本当にお会いしたかったです。私は金正日同志の愛情と配慮によってこのように健康です」

国防委員長は明るく笑ってヤゾフと記念写真を撮った後、面談室に向かった。

ヤゾフとの会見は5時間近く続いたが、その大部分は軍事に関する事柄だった。

国防委員長はある一つの軍種や兵種だけでなく、陸海空軍のすべての兵種について、現代軍事科学の先端技術と装備について把握しているだけでなく、現代戦の戦略戦術と細かな戦闘組織法に至るまで、軍事の各分野に通暁していた。

それに感動したヤゾフは、国防委員長にこう言った。

「私はきょう今一つの軍事アカデミーを卒業したようなものです。

尊敬する金正日同志の幅広い軍事的見識と該博な知識には完全に両手を挙げました。尊敬する金正日同志は政治の大家であるばかりか、軍事においても傑出した大家です。私は尊敬する金正日同志の弟子になります」

その後、ヤゾフはその回想談で金正日国防委員長を次のように称えた。

「金正日同志は一言でいって、軍事においてもこの世の本当の『神様』である」

人民のために

2001年8月、ロシアを訪問していた金正日国防委員長はキーロフ工場を参観した。

総支配人は総合展示館を見て回る国防委員長に、工場で生産される各種の運輸機材はもちろん、機密とされていた防弾乗用車の技術的諸元まで説明した。

そして、野外での自動車の実動状況を見せ、誠意をこめて茶話会も用意した。

国防委員長は、随行幹部たちにロシアの人たちが勧める酒を一杯飲むようにと言い、サンクト・ペテルブルグ市長や工場総支配人と談話を交わした。

しばらくしてふと時計に目をやっては、もうモスクワ行きの列車出発時刻になろうとしているとし、随員たちに早く茶話会を終えて出発準備をするようにと言った。

「金正日同志、列車出発時刻を延ばすことにしますから、もう少しお休みになって下さい」

市長が言った。

わが方の随行幹部たちも一様に、あまりにも日程が詰まっているが、すこし緩めてはと進言した。

ところが、国防委員長は低い声で言った。

「みなさんの気持ちはよく分かります。しかし、われわれはここに休息のためでなく仕事をするために来たのです。私も一国の領袖であるまえに一家庭の父です。私にも愛する妻子がいます。愛する祖国と人民がいます。愛する祖国と人民、愛する家庭と遠く離れて、このロシアに来たのです。彼らのために仕事をすべきです」

国防委員長の言葉に随行幹部たちの心は熱くなった。

わけが分からず首をかしげていた市長も、国防委員長の言葉を通

訳から伝え聞いて、熱くなった目頭をハンカチで押さえた。

金正日国防委員長は催促するように言った。

「さあ、元気を出して出発しましょう」

ロシア正教寺院の鐘の音

2002年8月、金正日国防委員長がロシアの極東地域を訪れた時のことである。

列車がハバロフスクに近づいたころ、国防委員長は今日はロシア正教寺院である聖者インノケンチ・イルクーツキ寺院を参観することになると言った。

随員たちは驚いた。いかなる宗教も信じない国防委員長が日程にもないロシア正教寺院を見ようとは、と思ったのである。

「正教寺院とは信者たちが訪ねるところではありませんか」

「私は信者ではないが、宗教も政治の対象になるから見ようというのです」

国防委員長は何も驚くことはないとし、こう続けた。

「ロシア人民が好んで信じる宗教であるから、われわれが正教寺院を参観するのはよいことであって悪いことではない。われわれは決して偏狭であってはならず、他民族の慣習を尊重すべきだ。正教寺院を参観すればロシア人民の風俗も知り、彼らが何を考え、何を志向し、何を願っているのかという内面世界も知ることができるし、6000万名に達する正教信者とも親しくなれるのだからよいことではないか」

国防委員長は、政治家であれば当然、宗教についても深く知る必要があるとして、ロシア正教の発生と発展の歴史について、そして今日世界に存在する15の独自の正教教会のうち一番大きい教会と見なされているロシア正教が国政に無視できない影響を与えていることを具体的に語った。

この日、正教寺院に着いた国防委員長がしばし周囲の環境や寺院の外観を見ている時だった。

突如、太く荘重な鐘の音が響いた。

みんなの目は一斉に鐘の音が響く方へ向けられた。

寺院の院長は鐘楼を指差して、金正日将軍を歓迎して寺院の鐘楼守が鐘をついている、寺院の鐘は誰でもつけるものではなく、鐘のつき方を教える学校を出た人だけがつくのであって、今鐘をついているのはそういう鐘楼守の中でも最もすぐれた人である、と説明した。

そして、ロシア正教の儀式では、太陽が中天に昇った正午に鐘をつくのが戒律になっているが、今日に限ってその慣例を破って午前

に鐘をついている、と言った。

寺院の院長は胸に当てた両手を万歳を叫ぶかのように大きく広げ、興奮の色を浮かべてこう言った。

「わが寺院に太陽が訪れました。太陽が訪れたのですから鐘の音を響かせるのは当然なことです」

鐘の音はハバロフスクの空に長い余韻を残して響いた。

ウォロチャエフカ師団で

金正日国防委員長は2002年8月のロシア訪問の際、極東軍管区傘下のウォロチャエフカ師団も訪問した。

1917年の10月大革命の勝利と共に生まれたこの師団は、国内戦争と第2次世界大戦を経て今日に至るまで戦場で無敵の勇猛を馳せた偉勲の多い部隊である。

戦闘栄誉博物館に案内されて戦闘技術機材を見た国防委員長は、若い軍人たちには何をさておき腹一杯食べさせることだと言って、軍人食堂にも入ってみた。

国防委員長は部隊の軍人たちが副業基地で収穫したという大きなカボチャやキュウリ、トマトなどを見て、これは軍人により十分に給食させようとする心構えで指揮官たちが根気よく努めた結果だと称え、ここには山菜が多いはずだが、それをよく加工して軍人たちに食べさせると健康にもよく、食卓も豊かになるだろう、と言った。

賞賛に感動した師団の指揮官がこう言った。

「尊敬する金正日元帥同志、実際にこれは私たちが朝鮮を訪ねた時、元帥同志が現地視察した人民軍部隊に学んできたおかげです」

そして国防委員長に、師団を訪れた記念として親筆を残してほしいと願い出た。

彼の願いを容れて国防委員長は訪問録に闊達な筆致で親筆を残した。

「偉大な伝統を受け継いだ師団に栄光を捧げる。

2002. 8. 22.

金正日」

彼らは国防委員長に真心こもった石写真工芸『ウスリー虎』を贈った。

朝鮮側も師団に絵画『朝鮮虎』を贈物した。

偶然なことか、虎と虎の交換なので贈物の意味が弱まったかのような気がした。

つまり一方はウスリー虎を贈って朝鮮虎をもらい、もう一方は朝鮮虎を贈ってウスリー虎をもらったようである。

それでロシアの人たちは、誠意を尽くしたのにそれがなんとなく効果がなかったようなので、残念な思いをしていた。

ところが、国防委員長は周りに漂うそのごちない感情を瞬時に吹き飛ばしてしまった。

「わが方の『偵察兵』たちが虎の交換を考えついたのはでかしたことだった。われわれは貴方が贈り物に虎を選んでいることを前もって承知していたのです」

みな声を立てて笑った。

瞬時に気の利いたユーモアで互いの感情をより近しく、親しくさせてくれた国防委員長の言葉に、ロシアの人たちは楽しく笑いながらも驚嘆を禁じ得なかった。

ロシアの極東で

2002年8月、金正日国防委員長がロシア連邦の極東地域を訪問した時のことである。

失業したのでは？

国防委員長はガガーリン名称コムソモルスク・ナ・アムール航空生産コンビナートを参観した。

ここで製作された各種航空機の年代順展示場で国防委員長は随員たちに、これは第2次大戦で大きな功績を立て、これは去る朝鮮戦争の際、朝鮮人操縦士たちが乗って戦った飛行機と同じものだ、などと説明した。

そして、企業の幹部に先端技術で装備された最新型航空機の性能と諸元について具体的に質問し、企業が国防力の強化と航空運輸の向上に大きく寄与していることを評価した。

国防委員長は総支配人の案内で、それまでどの誰にも見せたことのない生産現場を見て回った。

航空機生産の第一の工程である設計室では、何人かの設計士がコンピュータの前で新型航空機の設計を行っていた。総支配人は、ここでは以前数百人の設計士が働いていたが、今はコンピュータの導入で、少人数の働き手がいるにすぎないと言った。

「では『解雇』された設計士たちはどうなりましたか。彼らは失業したのではないのでしょうか」

国防委員長は、堅苦しい儀礼的な雰囲気を一瞬にして和らげ、明るく笑った。

ロシアの人たちは申し合わせたように顔をほころばせた。

総支配人はこう答えた。

「『解雇』された設計士たちはほとんどが新しい技術を学び、それぞれ希望した業種で働いています。ありがとうございます、金正日同志。わが設計士たちのご心配をさせていただいて……」

鉄階段と筆致

金正日国防委員長は航空生産コンビナートについてアムール造船所を訪れた。

造船用艀装品や遊覧船など各種の生産製品がある展示場を見て回り、大型船舶修理現場に立ち寄って船舶修理状況を確認していた国防委員長は、ふと船体の上に上がってみようと言った。

総支配人は大いに驚いた。

高さ数十メートルもの船体の上では労働者の作業中であり、そのうえ、そこまでには狭くて急な鉄階段を登るしかないからだった。

彼は船体の上に上がるのは危険であり、自分も現場にしばしば出ているが、船体の上に上がるのはごく稀であると言って難色を示した。

「私のことは心配しなくてもいいです。

朝鮮に百聞は一見に如かずという言葉がありますが、一緒にあそこまで上がってみましょう」

国防委員長は先に立って階段を上がりはじめた。

総支配人その他の人たちは国防委員長の後について100以上もの狭くて急な、雨に濡れた鉄階段を上がりはじめた。

時間もかなり流れ、国防委員長が造船所を離れようとする時だった。

先から国防委員長になにか言いたげにそわそわしていた総支配人が思い切って言った。

「尊敬する金正日国防委員長同志がわが造船所をお訪ねしたのはわれわれの最大の光栄であり、誇りです。それゆえに、われわれがいつまでも末永く伝え、追憶すべき文を一筆お願いします」

全然予期しなかった状況なので随員たちは哑然としたが、国防委員長は気持ちよく応じ、書いて上げましょう、総支配人の願いは十分容れる用意があります、早く本を持ってきてください、と微笑んだ。

生産現場に机と椅子が置かれ、書き物をする準備が整った。

国防委員長は気さくに椅子に腰掛けてペンを取り、しばらく考えて次のように書いた。

「長い歴史と栄えある伝統を持っているこの造船所の労働者たちに挨拶を送る。

2002. 8. 21.

金正日

瞬間、大きな拍手喝采が上がった。

記者たちが金正日国防委員長の闊達な筆致をカメラのレンズに収めようと我先に近寄った。

風変わりな「インタビュー」

金正日国防委員長がシャールゴル島にある「コスモス」児童キャンプに立ち寄って帰る途中、遊覧船でのことである。

ロシアの幹部たちが国防委員長のために船上で宴会を催したが、この時、国防委員長は平壤で会ったことのあるロシア女記者を呼び寄せた。

彼女はその年の2月、ロシア連邦の極東連邦管区駐在大統領全権代表が率いる代表団の一員として平壤に来ていたオリガ・ペトロブナ・マルチェバだった。

あの時、彼女は代表団宿舎を訪れた金正日国防委員長に、自分が知りたがっていた問題についていくつかの質問をした。

オリガ:金正日将軍にとってこの世で一番大事な近しい方は誰なのですか?

国防委員長:それは私が幼い時に亡くなった母です。

母は女性革命闘士で、わが子の立派な成長を願っていました。……私は母のおかげをたくさん被りました。

オリガ:ロシア訪問の時に一番印象に残ったのは何でしょうか?

国防委員長:(それはプーチン大統領との対面と付合いです、ロシア人の親切さだとし)私は彼らの眼差しから私に対する好感を読み取ることができました。それがとてもうれしかったです。

その時の栄光を抱いている女記者は、国防委員長に呼ばれてすぐに近寄ってきた。

「あ、久しぶりです」

国防委員長は明るい笑顔で彼女を迎えた。

そして、今回は何を聞きたいんだ、手帳やボールペンはお持ちだろうね、早くそれを持ってここに座りなさい、と言った。

周囲の人々の顔がほころびた。

オリガは記者の職業的好奇心から質問を始めた。

オリガ:金正日将軍の今回の極東地域訪問の目的はなんですか?
国防委員長は椅子に背をもたれて答えた。

ロシア連邦と朝鮮民主主義人民共和国は長い親善関係を持っており、この関係は2000年7月に平壤で、そして2001年8月にモスクワであった両国指導者の最高位級対面の後、特別に強化された。ロシアとの友好は単なる回復でなく新たに発展している。今は互恵的な基礎の上で連携を保つのが重要であり、そのために最も現実的なのはロシアの極東地域と朝鮮民主主義人民共和国間に経済的および文化的協力分野の連携を実現することである。まさにこれが将来の協力をもっと有意義に行うための基礎となる。……

オリガ:将軍はなぜ飛行機ではなく、列車で旅行していらっしゃいますか?

国防委員長は豪快に笑いながら、私が飛行機で旅行すればとうてい何が分かることだろうか、何物もない、政治家にのみ会えるだろう、しかし私はロシアでよいものは何で、よくないのは何かをこの目で見てみたい……、と言った。

オリガ:将軍が極東地域の訪問からお受けになった最初の印象はなんですか?

国防委員長はすべてをじかに見ることができてうれしいとし、こう続けた。

「何でもよいことのみを見せようとするロシア人の高潔な気持ちが気に入ります。私は自らの活動経験を分かち合おうとする大らかで親切な人々に会っています」

国防委員長と平凡な女記者とのざっくばらんな「インタビュー」

を目の当たりにしたロシアの人々はみな深い感動を覚えた。

金正日国防委員長との単独「インタビュー」をしたオリガは、国防委員長に丁重に謝意を表した。

総支配人の感激

2002年8月、金正日国防委員長はロシア連邦沿海地方のウラジオストック市にある貿易港を視察した。

総支配人は、埠頭の入り口に金正日国防委員長を熱烈に歓迎する内容の大型スローガンを掲げ、従業員のうち一番綺麗な女性たちを選抜し朝鮮語の挨拶を覚えさせて国防委員長に花束を差し上げるようにし、参観する全過程に自分が直接国防委員長を案内し丁寧に説明したばかりでなく、昼食会では祝辞を述べた。

彼は国防委員長に次のように言った。

「金正日同志、最も偉大なるあなたの前で何をどう言ったらよいか分かりません。私は総支配人として、運輸分野について該博な知識を持っておられる金正日同志と席を共にしたことをまたとない幸運と思っています。

私は、両国関係を正常に発展させる偉大な金正日同志のために乾杯することを提議します」

国防委員長は彼に謝意を表し、このように述べた。

「私はいつもロシア人民を尊敬しています。

私が列車で来たのは、ロシアの人々を知り、ロシアの精神を感じるためでした。

実際のところ人民は変わりません。彼らは相変わらず強力で、善意的であり、意志の強いです」

国防委員長は語を続けた。

私はコムソモルスク・ナ・アムーレとハバロフスクの軍需工場を参観しながらこれを確信した。そこでロシア人の知的・肉体的力を実感した。彼らは精神力も保っている。私がハバロフスク寺院でなぜ1時間も鐘の音を聞いたか分る人は多くないだろう。私はロシア人民の心の底から湧き出る正教信仰心を感じてみたかった。……

国防委員長は国家における党の役割について話題を変え、党は人民の上に君臨してはいけない、党は人民と共にあるべきだ、人民から離れてはならない、と強調した。

総支配人は国防委員長に、羅針盤や時計、気圧計、温度計など航海に必要な計器が揃っている最新型の海上晴雨計を記念として贈った。

後日、彼はロシアの記者たちにこう言ったという。

「金正日同志への私の魅惑はいつそう強くなった。実に金正日同志は現実に明るく、非常に実務的能力の高い方で、この世に唯一無二の政治元老である」

贈り物—オルロフ種の馬

2003年2月、朝鮮民主主義人民共和国駐在ロシア連邦大使館では金正日国防委員長を迎えて、ロシア連邦のプーチン大統領からの祝電と贈り物を伝達する儀式が行われた。

贈り物はオルロフ種の雄馬3頭であった。

その馬はロシアの特産であり、賢く勇猛かつ剛力で世界的にもっとも優れた競馬用の馬の一種として公認されていた。ロシアではこの馬が他の国に広がらないように厳しく統制し、他の国に与える場合にも雄馬は必ず去勢するという。

ところが、プーチンが金正日国防委員長に贈った雄馬はすべて去勢していなかった。

なぜロシア大統領は国防委員長だけに例外の好意を施したのだろうか。

核拡散防止条約から脱退する措置を取ることで世界の耳目が朝鮮に注がれていたその年の1月中旬、ロシアは核問題を討議するため外務省の次官を大統領特使として朝鮮に派遣すると提起してきた。

国防委員長はこれを承諾し、特使一行に接見した。

国防委員長は会見の席で、朝鮮半島における核問題の本質とそれに関する朝鮮の原則的で一貫した立場、そして問題解決の方法について明白に説明して、ロシアに正しく認識させた。

帰国後、特使は国防委員長の言葉を大統領に伝えた。

2回にわたるモスクワとウラジオストックでの対面を通じて、金正日国防委員長の立派な風格に接していたプーチンは、誕生日を迎える国防委員長に祝電と共に大事なオルロフ種の馬を贈呈することにしたのである。

贈り物を伝達する儀式でロシア大使は、ロシアでは白馬に乗るのは凱旋将軍だとし、プーチン大統領がオルロフ種の白馬を贈呈するのは、金正日最高司令官が何事においても勝利と成果を収めることを願う心がこもっている、と述べた。

馬を護送してきたメンバーは、自分たちが大統領の命令に従いロシア特産のオルロフ原種の中からもっとも優れ、新しい環境に慣れやすい歳の馬を選ぶのに苦心し、選んだ馬を真心こめて管理したことを伝えた。そして半生馬の管理に当たってきた自分たちだが、今回のような栄誉ある命令を受けて遂行したのは初めてだと興奮して語っていた。

ブレヤ川のしぶき

2011年8月、金正日国防委員長はロシア連邦のシベリア及び極東地域に対する非公式訪問を行った。

新世紀に入って3回目になる国防委員長のロシア訪問は、伝統的な朝口親善を新たな高い段階へと強化し発展させるための転機をもたらした画期的な出来事として朝口親善の年代記に輝かしく記録された。

国防委員長は極東の大動力基地であるブレヤ水力発電所を参観した。

総発電能力200万余キロワットの大規模発電所であるが、山容が険しく、はるか遠く離れた所に位置しているため、外国人は誰一人として訪ねたことがなかった。

人民の力

展望台に上がる前に国防委員長は発電機室を見て回った。

発電機室がきちんと整っていると褒めて壁を叩いて見た国防委員長

は、これはパネル建築ではないのかと尋ねた。

支配人がその通りですと答えた。

国防委員長は発電所の幹部と談話を続けた。

「ダムの高さはどのくらいですか」

「140メートルです」

「落差高はいくらですか」

「120メートルです」

「ロシアで一番大きな高落差発電所ですか」

「ロシアで高落差発電所として一番大きなのはサーヤノ・シューセンスク発電所です。そのダムの高さは240メートルです」

「冬に湖水が凍りませんか」

「上流ではすこし凍りますが、ここは凍らないので電気生産に支障がありません」

「発電設備はどこで製作しましたか」

「ロシアの国産品です」

「配電設備はどうですか。……外国製のようですが……」

「そうです。配電設備はスイスから輸入しました」

「発電機室の天井をトラスが見えるように施工したのがよいです」

この日、発電所の幹部は国防委員長に発電所の訪問を記念して親筆を残してほしいと願い出た。

国防委員長は快諾し、彼らのさし上げる訪問録を手にして広げた。

そこには元ロシア連邦大統領をはじめとする中央の指導幹部たちの文が書いてあった。

国防委員長は闊達な筆致でこう書いた。

「ブレヤの自然を征服したロシア人民の力は無限である。

2011. 8. 21

金正日」

ロシアの幹部たちは拍手をした。

われ先に親筆をカメラに収める人々もいた。

「今までロシア人の誰でも残せなかった意味深い名言です。われわれはこの親筆をブレヤ水力発電所と共に永遠に大事にします」

感激した発電所支配人の言葉だった。

モモとピクルス

金正日国防委員長のアムール州訪問を歓迎して州長官が発電所で昼食会を設けた。

テーブルには誠意のこもるさまざまの料理が盛り沢山に並べられてあった。

テーブルを見回したロシア連邦極東連邦管区駐在大統領全権代表は、アムール州長官の脇腹を小突いて、にやっとした。

テーブルの準備がよく出来ている、これほどなら申し分ないという意味であろう。

微笑んだ国防委員長は、テーブル上の果物や野菜はみなアムール州の産物かと聞いた。

「ええ、そうです」

州長官の答えに、大統領全権代表も、どれもみなアムール州産のものだと付言した。

「ああ、そうですか。ではこのモモもアムール州で取れたものですね」

州長官はあわてた。実は、モモは州の産物でなかったのである。

「正直言って、そのモモは外国からの輸入品です。ところで、それをどうしてご存知なのですか。ほんとうに知らぬことはありませんな」

国防委員長は、いやそんなわけではない、私は、当地方ではモモがあまりよくできないことを承知している、いつだったか中国を訪問した際、これと全く同じようなモモを見たことがある、それでちょっと聞いてみたのだと言った。

州長官と大統領全権代表は、感にたえぬ表情で顔を見合わせた。

「ところで、テーブルにはなぜピクルスが置かれていないのですか」

ピクルスは酒を好むロシア人にとって、塩ニシンと共に酒の肴として欠かせぬものとされているのである。

州長官は、ピクルスがないではないが、そんなキュウリの塩漬けまでテーブルに乗せるのはどうかと思ひまして、と答えた。

「ピクルスが出なかったのを見ると、お酒を飲まないという心積もりのようすな」

「いや、そんなわけでは……。今すぐピクルスを用意するように致します」

直ちにピクルスの皿が運ばれて来た。

ところで、なぜか、全権代表と州長官は杯を唇に当てはするが、そのままテーブルへ下ろしてしまうのである。

「全権代表はどうしてお酒を飲まないのです」

「大統領から金正日同志を誠意を尽くしてもてなし、粗相のないよう、酒は絶対に飲むなと指示されたもので……」

「大統領の指示なら致し方ありませんな。でも、州長官は飲むべきです」

「上司が飲まないのに、どうして私が……」

「それならあえてお勧めはしません。後日、きっとわが国へお出で下さい。私が正式に招聘します。朝鮮へ来られたら、私の指示に従わなければなりません。ご両人の酒の実力を検分します」

国防委員長はこう言って、からからと笑った。座中が愉快的笑いに包まれた。

一家親類の集まりのような和気藹々とした雰囲気だった。

バイカル湖の新しい伝説

シベリア南部のブリヤート共和国とイルクーツク州の間にあるバイカル湖は、自然湖としては世界で一番深い湖である。

数千万年にわたる幾つかの段階の沈降現象によって形成されたバイカル湖は、17世紀後半期にシベリアを開拓したロシア人とブリヤート人によって知られ、40メートル以上の透明度と独特な自然の風景、特異な生物の棲息と昔から伝わってくる伝説によっていっそう有名になった。

2011年8月、金正日国防委員長はロシア訪問の途上でバイカル湖を見て回った。

不思議なこと

ブリヤート共和国の首都ウラン・ウデから乗用車で3時間程度走

ればバイカル湖に行きつく。

随行員を乗せた乗用車行列が先に発ち、国防委員長と共に出発したブリャート共和国の大統領と人民大会（フラル）議長はなぜかしきりに首をかしげていた。

（なぜだろう……）

朝鮮側の幹部は怪訝な顔をして彼らを眺めた。

その疑問は、途中の休憩場で解かれた。

共和国大統領と人民大会（フラル）議長が代わるがわる国防委員長にこう言うのだった。

「尊敬する金正日閣下、どうも不思議なことです。バイカル湖に待機していた者から2時間ほど前に連絡が来たんですが、急に湖が静まり返り、波も穏やかになったそうです」

「その通りです。昨日は終日雨が降り、数時間前まで強風が吹いて、山のような波が大きな船も呑み込んでしまいそうでした」

「バイカル湖はブリャートの人々が最も神聖視する所です。その聖地が妙術を使って荒波をなだめたのを見ると、金正日閣下が来られるのを知っているようです」

「そうです。確かにバイカル湖は前もって知っていました。そうでなくては、そんな変幻自在の妙が起こるはずがありません」

「それは、われわれの聖地が偉人である金正日閣下の訪問を熱烈に歓迎するという意味です」

「そんな意味で一杯して発つのがどうでしょう。お願いします」

国防委員長は愉快そうに笑って言った。

「私は一人で、あなたたちは数人もあるから、みなが勧めるなら私には自信がありません。どうしてもというなら、一杯ずつ飲

むことにしましょう」

共和国大統領も人民大会（フラル）議長も大いに喜んだ。

ところが、その時、人民大会（フラル）議長が妙な仕草をした。

グラスに酒をいっぱい注ぎ、それを左手の薬指につけて四方にはじくのだった。

「それはなんの意味ですか」

「バイカル湖に聖地に入る許しを請うわれわれの風習です。」

「では、私も許しを請わないと」

「いや、私が代わりに許しを請いました」

国防委員長は豪快に笑った。

乗用車の行列は再び発った。

「蒙古斑点」

ロシアの有名な観光名所である大自然湖—バイカル湖の景色は実に美しい。

高低の青々とした山並み、数十メートルまで透き通る清い水、世界淡水量のほぼ20パーセントを占めるというこの湖には、バイカルアザラシ、バイカルハクレン、チョウザメをはじめ珍しい動物が多く、動植物の4分の3が特産種である。

金正日国防委員長は旅客船「インペーリヤ」号に乗り、ロシアの幹部たちと談話を交わした。

国防委員長は、湖の水がきれいなのでそのまま飲んでもいいという彼らの言葉に頷き、この湖は水も景色も朝鮮の両江道に似ている、ブリヤートの人々はバイカル湖を聖地というが、われわれは両江道の白頭山を革命の聖山と呼ぶ、朝鮮の貴賓を迎えた今日は聖地

バイカル湖が大きな栄光に浴した日だというありがたい、風光明媚なシベリアの名勝バイカル湖は世界の誇りである、湖と周辺の自然環境をよく保存・管理して次世代に譲り渡し、ロシア人民の生活と福祉増進に大いに寄与するようにすべきであろう、と述べた。

国防委員長は昼食会に出されたその地方で「オームリ」と呼ばれるバイカルハクレンの燻製を見て、ブリヤート共和国大統領に尋ねた。

「バイカル湖にオームリが多いですか」

「おおよそ十億匹と推定しています」

「1年に何匹くらい獲っていますか」

「2億匹程度です」

「オームリの資源をどんな方法で保存していますか」

「人工的に卵をかえして放流しています」

「わが国でも川と湖に魚卵を大々的にかえして放流しています。国の資源を極力保護するのは、人民の生活と次世代のための万年大計の愛国事業です」

その時。

人民大会(フラル)議長がなにか思いついたかのように、国防委員長に、自分たちブリヤート人には生れる時から腰に青黒いほくろがあると言った。

思いのほかの話にみなあっけにとられた。

ところが、国防委員長は微笑んでそれなら私も知っている、それはほくろではなく斑点で臀部にできる、国際学術用語としては「蒙古斑点」と呼んでいるとし、こう言った。

「ブリヤート人はモンゴル族系です」

座中に嘆声が上がった。

列車での40分間

この日、国防委員長がスケジュールを終えて駅構内の列車宿所に戻ったのは夕方であった。

同行していたロシアの幹部たちが国防委員長にゆっくり休むようにと別れの挨拶をして帰ろうとすると、国防委員長は、一日中ご苦労だった、列車に上がって朝鮮ビールでも飲むのがどうかと勧めた。

彼らは国防委員長の好意に感謝し列車に上がった。

列車執務室に入ったブリヤート共和国大統領が驚いて尋ねた。

「ここが閣下の列車執務室ですか？」

国防委員長はそうだと答えてなぜ驚くのかと尋ねた。

「私は執務室が装甲列車だと思っていました。うっかり記者たちに騙されました」

「装甲列車か……。さあ、これが装甲列車に見えますか」

「いいえ、違います。一般列車です。ずっとこの列車に乗ってほぼ千里もなる遠い道を来られたのですか。揺れがひどかったでしょう。夜にお休みになる時だけでも停車すればよかったのに、そうもいかに……」

国防委員長は微笑みながら静かに言った。

「私は揺れる列車で過ごすことにはもう慣れています」

大統領は何も言わずにうなずき、思いにふけた。

国防委員長はロシアの幹部たちにビールを勧めた。

「朝鮮のビールがいかがですか」

「さわやかで本当に格別な味わいです。」

「ブリヤート人はマトンをよく食べるので太っているそうだが、年にどれぐらい食べますか」

「年中食べます」

「どうして食べますか」

「煮たり焼いたりして食べます。」

「ブリヤートは大陸性気候でしょうね」

「そうです。顕著な大陸性気候です。緯度上では北の方ですが、昼夜の気温の差が大きく、日照率が世界的にも稀に高いところです。年中300日以上が晴れています。」

「それではスイカがよくできるでしょう」

「そうです。スイカづくりにはうってつけの気候です。どうしてそれが分かりますか?」

「わが国の北方に茂山という地域がありますが、スイカが特別によくできます。ここの気候に似ています。ビールをもっとお飲みください。『ビール中毒』にはさせないから、遠慮なくお上がりなさい」

「感謝します。このうれしい日にさわやかな朝鮮のビールを思いきり飲みます」

みなが愉快地笑った。

列車でのこの40分間、それは朝口親善の情をさらに深めた意義深い時間であった。

祖国の人民を思って

2011年8月、金正日国防委員長はザバイカル民俗博物館の参観日程を変えて、ウラン・ウデの商業中心であるスーパーマーケット「メガチタン」を視察した。

予期しなかった訪問だったなので、スーパーマーケットにはショッピングする当地の住民で混み合っていた。

国防委員長は彼らに混じって売り場を一々見て回りながら、スーパーマーケットの支配人をはじめロシアの幹部たちに商品の仕入れや販売の状況について具体的に聞いた。

商品は自力で生産するのか、それとも輸入するのか。今売っている食用油の種類はいくつなのか。食用油の中で欠けているものはなにか。生魚を売っているのか。住民の1日のパン需要量はどれくらいなのか。毎日訪れる人は何人か。1日の売上高はどれくらいなのか。……

国防委員長はそこの実態を詳しく調べながら、同行したわが方の幹部たちに人民への商品供給において指針とすべき課題を示した。

この商店の食用油の中には黄色いものがあるが、十分に精製していないようだ。われわれは、食用油は必ず精製して人民に売らなければならない。超臨界抽出法を導入すれば実収率を98パーセント以上に高めながらも良質の食用油を生産することができる。……

この商店ではパンやトルテをはじめ様々な食品を自力で作って売っているそうだ。パンなどが切れそうになると、足りない分を商

店が自力で作っているが、1日に3～5トンずつ売るといふ。パンはロシア人がよくつくる。……

牛乳を138度の温度で殺菌して瓶詰めにすれば、冷蔵庫に入れなくても通常の温度で6カ月間は保存できるそうだが、その技術を取り入れると、商店で牛乳の販売で支障を受けないだろう。……

この商店では豚肉などの各種食肉とベーコンやサーロインなどの食肉加工品を多く出して住民の要求に応じて売っているというが、食肉専門店も同様である。今後われわれも食肉専門店のような商店を開店しようとする。……

このように、外国訪問中に現地の商業活動実態をみずから把握し、優れた点を取り入れるように指示した金正日国防委員長は、幹部たちを見回しながらこう述べた。

「われわれは商品をより多く生産するために取り組む一方、外国の商品も輸入して人民に売すべきです。

わが国の工場と農場で生産される商品だけでは人民の要求を満たすことができません。

平壤第一百貨店に国産商品はもちろん外国商品も提供すべきです」

ロシア指導部の誠意

2011年8月、金正日国防委員長がロシア連邦のシベリア及び極東地域を非公式訪問した時のことである。

メドベージェフ大統領は、金正日国防委員長を案内する極東連邦管区駐在大統領全権代表をハッサン駅にまで派遣し、国防委員長との対面のために休暇期間を後回しにし、モスクワから数千キロも離れたブリャート共和国の首都ウラン・ウデに出向いた。

メドベージェフ大統領は、数回も朝鮮を訪問して朝鮮人民に広く知られているロシア内務省内務軍アカデミー協奏団をウラン・ウデに送って特別公演を行い、公演を不滅の革命頌歌『金正日将軍の歌』で終えるように特別指示を下した。彼は自ら収集した世界的に有名なブドウ酒の中で10本の最高級ブドウ酒を選んで歓迎宴に出すようにした。

メドベージェフ大統領は、金正日国防委員長の訪問保障を大統領行政府が全的に主管するようにした。彼は双方実務担当者が朝日最高位級の対面と会談の場所をウラン・ウデ市内のブリャート共和国政府庁舎にすると事前に決めているにもかかわらず、会見場所をウラン・ウデ市郊外にある大統領専用招待所に変更させ、大統領行政府の儀典局責任幹部がじかに出向いて準備を進めるようにと指示した。

また、双眼鏡とブリャート人の伝統的な剣、フランスの技術を導入してロシアで生産したブドウ酒を幾箱も直に選んで国防委員長に贈った。

メドベージェフ大統領は国防委員長と多くの写真を撮ったが、そのたびすぐ大統領サイトに載せるようにし、それを携帯電話で国防委員長に見せた。

国防委員長は別れに先だって大統領に、ロシア訪問期間厚くもてなし、格別な好意を施したことに対して謝意を表した。

大統領は、今晚モスクワに帰りながら金正日同志のことを思います、私は金正日同志を平壤かモスクワで再会することを心から願っています、今日、金正日同志と成し得た合意がよく履行されるようにすべてを尽すでしょう、と言った。

金正日外交エピソード

執 筆：朴基成、崔賢哲

編 集：安鉄鋼

翻 訳：金正蓮

発行所：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日：チュチェ112(2023)年11月

7-230880100383

E-mail: flph@star-co.net.kp

<http://www.korean-books.com.kp>

ISBN 978-9946-0-2236-9



9 789946 022369 >

